

利用者にとっての総合目録データベースWWW検索サービス
- 利用者としてWebcatに期待すること -

大阪外国語大学附属図書館
多田剛志

1. はじめに

2. Webcatサービス開始による他館(機関)への依存度の増加

3. 書誌(bibliography)としてのWebcat

A. 個人書誌としての利用

タイトルフィールドへの入力による検索
フリーワードフィールドへの入力による検索

B. 著者書誌としての利用

著者名フィールドへの入力による検索
フリーワードフィールドへの入力による検索

C. 主題書誌としての利用

タイトルフィールドへの入力による検索
フリーワードフィールドへの入力による検索

D. 翻訳書誌としての利用

タイトルフィールドへの入力による検索
著者名フィールドへの入力による検索
フリーワードフィールドへの入力による検索

E. その他の書誌としての利用

4. Webcatさらなる発展のために - 利用者の期待と図書館員の課題 -

1. はじめに

総合目録データベースWWW検索サービス（以下Webcatと表記）が、平成9年4月より1年間の試行サービス期間を経て平成10年4月1日から本運用が開始された。

周知の通り、Webcatは目録所在情報サービスNACISIS-CATの総合目録データベースをWWW上で検索するサービスであり、近年の図書館蔵書目録データベースのインターネットによる公開の世界的な趨勢と、国内外の情報公開要請に応えるために開始されたサービスである（学術情報センターニュースNo.40より）。

私自身、目録作成担当業務から離れて久しく、窓口業務に従事していることから、Webcatを利用者と共にレファレンスツールとして利用している。この利用者と共に利用した経験を基に、図書館員（カタログガー）の目線からではなく、一利用者としての目線からWebcatを考察していく。

2. Webcatサービス開始による他館（機関）への依存度の増加

今日の高度情報化社会において、情報は氾濫し飽和状態である。にも拘わらず情報は増加の一途を辿り、それに比例するかのように利用者の情報収集要求も増加し、また多種多様になってきている。

S.R.ランガタンの図書館五原則にもあるように、すべての人にそれぞれ欲する資料を提供できればよいのだが、実際問題として利用者の要求を自館の資料のみで満足させることは不可能で、相互利用（貸借・複写・直接利用）により他館（機関）所蔵の資料に依存せざるを得ないのが実状である。

従来相互利用により他館の資料を利用する場合には、まず利用希望資料の所蔵先を確認する作業が必要であり、そのツールとして新収洋書総合目録（国立国会図書館監修）や学術雑誌総合目録（学術情報センター編）等の総合目録と、冊子体やCD-ROMによって刊行されている各館（機関）発行の所蔵（図書・逐次刊行物）・増加図書目録等を利用者に紹介し、利用者自身に所蔵先を調べて貰ったうえで他館へ利用依頼を行っていた。当然紹介したツールで全ての資料の所蔵先が調べられるわけではなく、不明の場合にはNACISIS-CATや、所蔵している可能性の高い他館へ直接FAX等で所蔵調査を依頼する代行検索により利用者に所蔵先情報を提供してきたが、代行検索の場合には検索漏れが無いよう入念に調査することを第一に考慮していたために、依頼を受けたその場で即時に情報提供することはせずに、利用者には2、3日の調査期間が必要である旨を了解して貰っていた。この点は図書館五原則にある図書館利用者の時間を節約せよの精神に反したサービスを行っていたかも知れない。

Webcat本運用サービス開始と同時に、少なくともNACISIS-CATによる代行検索にかかる調査期間の撤廃をめざし、Webcat検索専用端末を2台設置したところ、端末の占拠時間は毎日に増し、それに比例して相互利用を希望する利用者が飛躍的に増加している。例えば利用者が直接所蔵館を訪れ利用する場合には、本館発行の紹介状が必要

であるがその発行件数は昨年と同時期に比べ3割増であり、国立大学図書館共通閲覧証においても過去最高の発行枚数を更新中である。また、文献複写及び現物貸借依頼件数についても昨年の同時期に比べやはり3割程度増加している。反面所蔵調査依頼件数は激減しているが、これはWebcatによる所蔵検索によりその必要がなくなったためであると思われる。この顕著な例として、最近Webcatの検索結果をプリントアウトした用紙を持参してくる利用者が、増加してきたことが挙げられる。また、他館の利用者からの問い合わせの中でも、「所蔵はすでに、Webcatで確認済み。」や「Webcatで見たのですが、一般の者でも利用できますか？」といった問い合わせも増加してきている。またWebcatの検索結果をプリントアウトした用紙を持参し、直接来館してくる利用者も増加してきている。

本運用から約半年（試行期間から約1年半）で、すでにWebcatは総合目録として機能しており、NACSIS-CATの所蔵登録件数及び書誌登録件数（遡及登録も含む）とNACSIS-CAT参加館の増加に伴い、より一層この傾向は強くなっていき、さらに他館への依存度（他館からの依存度）が増加することが予想される。

また県立図書館等のNACSIS-CATへの参加により一般利用者（大学等機関に属していない）についても利用希望の増加が予想されることから、大学図書館の地域開放をも念頭においた利用しやすい図書館としての環境を整えて置く必要は当然考慮しておかなければならない。

3. 書誌 (bibliography) としてのWebcat

Webcatの本来の利用目的は、NACSIS-CATで作成された全国の図書館で所蔵する図書と雑誌の目録所在情報検索であるが、Webcatは書誌 (bibliography) としても、かなり有用なレファレンスツールとして機能している。

具体的にどのように書誌として利用（利用者に紹介）しているかを挙げてみる。ただあくまでも副次的な利用が前提で、書誌として出版されている資料も利用者に紹介することは言うまでもないことである。また書誌のそれぞれの名称については、「情報源としてのレファレンスブック 長澤雅男著 日本図書館協会（1989）」を参考にした。

A. 個人書誌としての利用

タイトルフィールドへの入力による検索

個人書誌の場合は、タイトルに個人名が含まれている場合が多く、このフィールドに個人名を入力することで個人書誌として利用できる、また前方一致（個人名*）、中間一致（*個人名*）、キーワード（個人名を漢字・カタカナ・ひらがな・ローマ字及びこれらの組み合わせによる入力）での検索が可能である。和洋書区別なく抽出されるが西洋人の場合には原綴（ウムラウト・アクサン等の表音符号はとった形）による検索と日本での一般的な表記による検索をする必要がある。但し、該当件数が200件以上の場合は他のフィールド（全てのフィールド

で前方一致可)とのAND検索による再検索(絞り込み)の必要がある。

*前方・中間一致による検索は、個人名が不正確な場合に行うのではなく、あくまでもタイトル中のどの部分に個人名が含まれているか不明の場合に使用するものである。

フリーワードフィールドへの入力による検索

このフィールドに個人名を入力し検索すればよいのだが、検索語の入力に際して注意すべき点として、原綴による入力と姓と名の間スペースを入力(姓と名によるAND検索が行われる)する必要があることである。また著作物そのものも表示されるので、作家・著作研究資料が著作物かの見極めが必要である。和洋書区別なく抽出されるが、該当件数が200件以上の場合は他のフィールドとのAND検索による再検索の必要がある。

*スペースを入力しなくてもヒットするデータもあるが極端に少ない。

B. 著者書誌としての利用

著者名フィールドへの入力による検索

このフィールドに著者名を入力し検索すればよいのだが、Aの で述べた様に、原綴による入力と姓と名の間スペースを入力する必要がある。和洋書区別なく抽出されるが、該当件数が200件以上の場合は他のフィールドとのAND検索による再検索の必要がある。

*外国人名の場合イニシャルのピリオドを取り払った形で入力するように利用の手引きに記述されているがピリオドを付けた状態で検索しても結果に変わりのない著者が多い。

フリーフィールドへの入力による検索

Aの を参照。

C. 主題書誌としての利用

タイトルフィールドへの入力による検索

このフィールドに求める主題語を入力し検索することにより、タイトル中に主題語が含まれている場合に限り有効であるが、タイトル中に主題語が必ず含まれているとは限らずあまり有効な検索方法とはいえないが利用可能である。

フリーワードフィールドへの入力による検索

主題書誌として利用する場合このフィールドに主題語(件名)を入力し検索する方法が最も有効と思われる。分類番号を入力することによる検索も可能であるが利用者には紹介していない。

主題語(件名)での検索の場合、主題となる語を入力(件名標目表(BSH、NDLSH等)に基き主題語を入力)すれば比較的容易に検索できる。主題語による検索の場合には、該当件数が200件以上の場合が殆どであり他のフィールドとのAND検索による再検索の必要がある。

分類番号による検索については利用者に紹介していないと述べたが、その理由を挙げてみる。

まず分類番号を入力し検索する場合には3桁以上（NDCでいうところの目までで細目（分目、厘目））の入力を行っても求める書誌が正確に抽出されないことである。例えば中国の経済に関する資料を分類番号（NDCによる）によって検索を行った場合の入力データと抽出データ（具体的なタイトルではなくデータの特性）は次のようになる。

・入力データ 3 3 2 . 2 2 (N D C 中国経済)

* 検索漏れがないように前方・後方・中間一致を含めた検索も行うものとする。

・抽出データ

ア．分類番号が3 3 2のデータ。

イ．物理レベルの巻号が3 3 2または2 2のデータ。

ウ．叢書・シリーズの巻号が3 3 2または2 2のデータ。

以上のように正確にデータが抽出されないことと、元々分類番号による検索には分類法の知識が必要ということもあり、利用者には紹介していない。

D．翻訳書誌としての利用

タイトルフィールドへの入力による検索

基本的には、このフィールドに翻訳書名をそのまま入力することにより、翻訳書誌として利用できる。注意点として、洋図書の検索の場合には単語間のAND検索（和図書でも可）され、入力の際には冠詞・前置詞は指定せず、ウムラウト・アクサン等の表音符号はとった形で入力する必要がある。また和図書（中国語等の漢字表記資料含む）の検索に際しては、完全形の入力による検索が可能である。

* 冠詞・前置詞は指定しても検索可能であった。

著者フィールドへの入力による検索

Aの を参照。

フリーワードフィールドへの入力による検索

Aの を参照。

E．その他の書誌としての利用

Webcatが個人・著者・主題・翻訳書誌としても有用なレファレンスツールであり、また検索方法について具体例を挙げて述べてきたが、Webcatはあらゆる分野を包括した全国書誌・販売書誌等の一般書誌としての利用も可能である。具体的な利用方法については、今回紙面の関係上紹介しない。

4. Webcatさらなる発展のために - 利用者の期待と図書館員の課題 -

Webcatを図書館員（カタログラー）の目線からではなく、一利用者の目線からと称し考察を試みてきたが、これからのWebcatへの期待と課題を述べていく。

オンラインヘルプ詳細版利用の手引きにもあるように“簡単な操作”でしかも従来の総合目録と違い、図書・雑誌という資料形態を意識することなく所在情報を得ることができる。がしかし、“簡単な操作”とは果たして誰にとって“簡単な操作”なのか？という問題がある。確かに、利用の手引きも簡略・詳細・英語版と3種類用意されており、これらを読めば満足のいく検索結果を得ることは可能であるが、これはある程度の目録知識（NACISS-CATの知識も含む）が必要であり、検索結果に対する成否は利用者の検索（利用）技術レベルに依存されているのが実状である。

今日のパーソナルコンピュータの普及とインターネット利用者の増大により、“だれが”・“どこから”・“いつ”Webcatを利用するかわからない。これは図書館員に検索方法を聞く術もなく、検索の成否（検索結果による再現率の高低）すら判断できない利用者の存在を意味する。例えば、簡略版の利用の手引きだけしか読んでいない利用者が日本人の著者名（中国人等の漢字表記著者含む）で検索を行った場合“姓”と“名”の間に空白を入れて検索してくれるであろうか？またフリーワードフィールドでキーワードによる検索を行う場合、シソーラスかフリーワード及びサーチ検索かスキャン検索の意識や概念を持っていることは期待（特に期待する必要はないと思われるが）できず、そのためにどのような検索語によって検索を行うか想像もつかない。このような利用者に対しては誰が手助けするのか、WWW版で公開した以上学術情報センターではないであろうか？

ここで、Webcatを今以上のツールに発展させるために、学術情報センターに期待することを挙げてみる。

まず、日本人著者（中国人等の漢字表記著者含む）による検索は完全形（姓と名の間の空白を不要にし、姓と名によるAND検索は行わない）検索を可能にすることである。これはALフィールドのカンマ+スペースの部分を取り除く（対象データの定義が必要であるが、技術的にはそれほど難しくはない）ことで可能と思われる。

次に、現在のWebcatの検索画面に雑誌記事索引CD-ROM版（国立国会図書館編集・制作）の用語一覧機能のように検索語の入力をリストからの選択が可能な新しいメニュー方式（プルダウン等）フィールドの追加（用語の選択基準等問題は多々あるが、これも技術的にはそれほど難しくはない）を希望する。これにより、より一層ユーザーフレンドリーなサービスとなり、また利用者の検索（利用）技術レベルに依存した検索結果の成否はかなり解消されるであろう。

また、利用の手引きの定期的な整備・見直し（現在改定準備中とのことである）も必要であり、学術情報センターのキメ細やかなメンテナンス（現時点でもかなりキメ細やかであるが、さらなる発展のためにもう少し...）を期待する。

Webcatを今以上のツールに発展させていくために学術情報センターに期待することを述べてきたが、当然我々図書館員もWebcatをさらに発展させていくために為すべきことがある。Webcatの検索画面及び利用の手引き改善要求・提言や利用

者の検索（利用）技術レベル向上の手助けをすることも当然必要であるが、何よりもまずWebcatはNACISIS-CATのデータが基になっていることから、NACISIS-CATの所蔵及び書誌登録件数増加のために、まず自館所蔵資料のNACISIS-CATへの所蔵登録が必須事項であり、また新規書誌作成においては、図書館員（カタログガー）の自己満足による目録作成を行うのではなく、誰のための目録かということを常に念頭においた目録作成が必要である。目録とは利用者が求める資料についての情報源であり、目録を見ることにより利用者が実物を意識し、また他の資料との区別・識別ができるものでなくてはならない。

検索（利用）技術にレベル差があるように、図書館に対する認識も個々の利用者によって違って当然であり、『図書館員の常識は利用者の常識では決してない！』このことを常に一人一人の図書館員が持ち続けていくことこそがWebcat（NACISIS-CAT）のさらなる発展につながっていき、また成長する有機体として図書館自体も発展していくものと信じて疑わない。